

# スウェーデンの画家カール・ラーションとナショナル・ロマンティシズム —— 画集『エット・ヘム』のテキスト分析を中心に ——

川 島 洋 一\*

## Swedish Painter Carl Larsson and National Romanticism

—— Some Aspects of the Text in *Ett hem* (A Home) ——

Yoichi Kawashima

Carl Larsson (1853–1919), Sweden's most beloved artist, has published his first collected paintings together with the artist's essay, the book entitled *Ett hem* (A Home) in 1899. The purpose of this paper is to show Larsson's participation in National Romantic movement among his contemporary artists, and to examine the text of *Ett hem* so as to understand his concept of National Romanticism. Several aspects of his thought were observed, for example his attitude toward Swedish tradition, notion of national art, view on ordinary dairy-life, belief in the role of art and so on.

### 1. 序

19世紀末から20世紀初頭にかけてのスウェーデンなど北欧諸国では、一般にナショナル・ロマンティシズム<sup>1)</sup>と呼ばれる芸術思潮が開花していた。それは民族的あるいは国民的な芸術表現や制作上の主題を模索することにより、独自の近代的な芸術の確立を目指した動向であったといえることができる。筆者は、スウェーデンの建築におけるナショナル・ロマンティシズムの本質解明に向けた検討作業を通して、近代建築運動の意味を再考することを主要な研究課題としているが、その際に建築よりもやや早い時期に開花した美術の分野におけるナショナル・ロマンティシズムの内容も視野に入れ、建築との関係を考察することは必要な作業の一つである。

スウェーデンの国民画家と呼ばれるカール・ラーション (Carl Larsson 1853-1919) は<sup>2)</sup>、同国の美術の分野におけるナショナル・ロマンティシズムの動向の中心的な人物の一人であったと考えられる。また彼は一般的な意味での画業における活躍だけでなく、その後半生に家族と共同でデザインし、既存の民家を増改築して営んだ自邸<sup>3)</sup>が広く紹介されることにより、同国の近代的住宅像や近代的生活像の形成にも大きな役割を果たしてきた<sup>4)</sup>。そのために建築におけるナショナル・ロマンティシズムを論じる際にも、無視できない存在となっている<sup>5)</sup>。彼の自邸とそこでの一家の生活を、スウェーデンの国民に紹介する主な媒体となったのは、ラーション自身の手になる一連の絵画作品であり、その中でも特に1899年に出版された最初の画集『エット・ヘム

---

\* 建設工学科 建築学専攻

(ある住まい)<sup>6)</sup>』の成功に負うところが大きい。『エット・ヘム』には24枚の水彩画と共に、やはりラーションによって記された15ページにわたるエッセイが収録されているが、そのテキストは水彩画に添えられた単なる解説文というよりは、それ自体が独立した読み物として読むことができる性格のものである。むしろテキストという表現形態の性質により、当時のラーションの思想や自邸をモチーフにした作品の制作意図などが、より明解に表現されていると考えられる。

本稿は、ラーションにおけるナショナル・ロマンティズム概念の内容を解明するための準備段階として、画集『エット・ヘム』の主にテキストの内容を分析することにより、画集出版当時のラーションの思想を検討することを目的とする<sup>7)</sup>。ここでは、まず『エット・ヘム』出版に至るまでの彼の活動を概観し、ナショナル・ロマンティズム思潮との関わりを整理して示すことから試みたい。

## 2. スウェーデンのナショナル・ロマンティズム思潮の概要とその背景

北欧文化におけるナショナル・ロマンティズムの思潮は、19世紀初頭にまず文学の世界で出現した。その後19世紀を通じて他の芸術分野にも浸透し、世紀末にその最盛期を迎えることとなる。政治的な民族主義に端を発するこの思潮は、文化の領域においても基本的にナショナル・アイデンティティーを標榜した。近代における「国民国家」の意識を背景に、自国の伝統や民族性を反映しながら、しかも近代性を備えた独自の文化の姿を模索する動向であったといえる。ただし北欧の場合に特徴的なことは、「国民国家」の意識と並行して、北欧民族の一体性や連帯を謳う「スカンディナヴィア主義」と呼ばれる意識とが、同時に存在していたことである。これは一見矛盾するようであるが、自らのアイデンティティーを北方の独特の自然やヴァイキングとしての英雄的な過去などに求めざるを得ない彼らにとって、これら二つの意識は表裏一体のものであったと考えられる。北欧の歴史を振り返れば、戦争や国の併合といった国家間の利害対立と、スカンディナヴィア主義に基づき連帯を求める運動との、両極のできごとで彩られてきたことが理解できよう。したがってナショナル・ロマンティズムの **national** の意味には、「国民的」とも「民族的」とも解釈できる微妙なニュアンスが含まれている。さらにヴァイキングに象徴される英雄的な歴史の賛美や、民俗的な風習の懐古、民衆のあいだの伝承の発掘、芸術表現における伝統的なモチーフの参照などに、**romanticism** と呼びうる発想を認めることができるだろう。

ところで本稿で扱うスウェーデンの美術界におけるナショナル・ロマンティズムは、1880年代に開花し90年代に一気に全盛時代を迎えることとなったが、この時期は他のヨーロッパ諸国と同様に、スウェーデンにおいても社会の姿が近代化の波によって激変した時代であった。すでに当時、ヨーロッパ周縁の貧しい農業国となっていた同国でも<sup>8)</sup>、1850年代から工業化が始まると、製鉄業と木材加工業を軸に成長を続け、70年代には国外需要の急増により大きく経済発展する。それに伴い80年代には、普通選挙権獲得運動を核とした「国民運動<sup>9)</sup>」と総称される社会改革運動が各方面で本格化し、民主的な社会が急速に形成されていった<sup>10)</sup>。後に高度福祉国家を実現した同国の基本路線は、この時期に築かれたものである。さらに当時の時代背景として、大量の農民が移民となって流出していた状況はきわめて重要である。1851年から1920年の間に

約120万人のスウェーデン人が北アメリカへ渡ったとされるが<sup>11)</sup>、1870年代に全人口がようやく400万人を超えた<sup>12)</sup> ことと合わせて考えると、国家の基盤を揺るがすほどの深刻な事態であったことが想像されよう。一方で国際情勢の面では、フィンランドのロシア化政策やノルウェーの独立問題などの事態を受け、それまで外敵に対する直接の脅威が存在していなかったスウェーデンにおいても、国境線に対する不安から90年代ナショナリズムと呼ばれる風潮が社会全体に広がっていた。こうした内外の状況は、ヨーロッパ大陸から地理的に隔絶された同国にとって、近代的な社会の実現による「後進性」の克服が急務であるという認識を、立場や利害の違いを超えて国民の幅広い階層に与えたと考えられる<sup>13)</sup>。スウェーデンの芸術家たちにとって、その認識は彼らの作品の中だけに反映されるべきものではなく、保守的な芸術アカデミーの組織を彼らの力によって改革することにより、社会全体の改革の一端とすることも当面の目標として掲げられたのであった<sup>14)</sup>。

さてナショナル・ロマンティシズムと呼ばれる思潮の輪郭を示してきたが、その概念と用語の妥当性について若干の説明が必要となろう。まず当時の芸術家や建築家、思想家などこの思潮を担った当事者たちは、おそらくこの用語を使わなかったことに注意しておきたい。彼らの議論において **national** はしばしばキーワードとして使われるが、**National Romanticism** あるいは **nationalromantiken** の用語は、管見では美術史家ヨニー・ルースヴァルによる1932年の使用例が最初である<sup>15)</sup>。19世紀末北欧の思潮において、**national** または **romanticism** と呼ぶ傾向が見られたことは前述した通りであるが、後世の歴史家が名づけたと思われるこの概念の実際の適用にあたっては、個々の事例の内容を確認することが必要となろう<sup>16)</sup>。またこの概念は、ここではあくまでも文化思潮あるいはそれに基づく動向を意味するにとどまる。芸術の各分野にあっては、この思潮を反映した制作上の主題や表現をもつ作品が出現したのは当然であるが、いわゆる芸術様式の概念とは一線を画するものである。

### 3. カール・ラーションの芸術活動の概要とスウェーデンの画家たちの動向

ラーションの芸術活動は、1890年ごろを境に大きく2つの時期に分けられる。

前半期（1853年に生れてから90年ごろまでのおよそ37年間）の彼は、1866年から76年までストックホルムの芸術アカデミーで学び、77年パリに渡る。1870年代から90年代前半のパリ周辺には、北欧諸国の芸術家が集まり、新しい芸術と自由な社会の姿を模索して一大コロニーを形成していた<sup>17)</sup>。ラーションはその中心人物の一人となる。彼らはパリのサロンで認められることを当面の目標にしたが、作品はあまり評価されなかった。実はアカデミックな様式で制作する彼らの努力は的外れであり、当時のサロンの主流はすでに戸外の自然光のもとで制作する外光派に移りつつあったのである<sup>18)</sup>。落選と貧困で絶望に陥っていた1882年の春、パリ郊外のグレ・シュール・ロワンを訪れたラーションは、バルビゾン派を意識して外光主義を取り入れ始めた北欧の画家たちの新しいコロニーに参加した<sup>19)</sup>。ラーションはこの場所で外光主義の技法を短期間で習得し、水彩を使って光に満ちた明るい画面で描くようになる。さらに農民の日常生活や、自然の風景を切り取って描くリアリズムの手法に転向した。また、彼は生涯の伴侶カーリン・ベリイェー

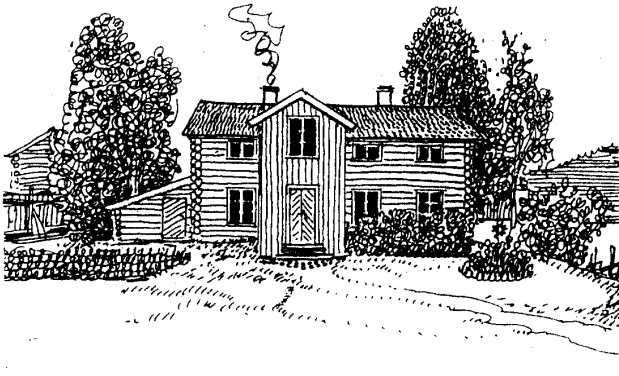
とここで知り合い、ただちに婚約している<sup>20)</sup>。こうした作品と生活上の変化により、彼は転機を迎えた<sup>21)</sup>。ラーションは83年のパリのサロンで3等メダルを受賞し、さらに同年に描いた2点の作品も、スウェーデン国立美術館とフランス政府の買い上げになっている。この輝かしい成功を見て、ストックホルムの芸術アカデミーはラーションを教授に任命するが、彼はこれを拒否し反アカデミー運動に身を投じる。1889年にスウェーデンに帰国したラーションは、妻カーリンの父から譲り受けたダーラナ地方スンドボーンの民家の増改築を始め、翌90年ごろからその自邸の様子とそこでの一家の生活を水彩画に描き始めた。グレ・シュール・ロワンで習得した外光主義の技法と、母国スウェーデンの自然や民衆の日常生活を描く主題とが結びつき、彼の画風が確立した時期といえる。このように前半期の活動は、画家としての修行時代であったといえよう。

後半期（すなわち1890年ごろから没した1919年までのおよそ29年間）のラーションは、上述の画風により作品を続けて制作し、その活躍が大きく実を結んだ時期である。特に自邸とそこでの一家の生活を描いた水彩画集『エット・ヘム』を1899年に出版すると大好評を博し、以後一連の画集を出版して、スウェーデンの国民画家としての地位を確立した。このように後半期の活動は、画家としての充実あるいは完成を迎えた時代であったといえることができる<sup>22)</sup>。

このようにラーションの芸術活動の全体を概観したが、彼および同時代のスウェーデンの画家たちがナショナル・ロマンティシズムの理念を育んだ過程のいくつかを指摘しておきたい。まずパリ周辺に集まった北欧諸国の芸術家によるコロニーの存在である。彼らの多くは、自国の保守的な芸術アカデミーに失望してパリに來た若者であり、新しい芸術を模索すると同時に理想の社会の姿も探し求めていた。パリのスウェーデン人芸術家たちの場合、1870年代末から毎週集会を開き、スウェーデン本国で「国民運動」が活発化するのに呼応して、彼ら独自の運動を組織していた。彼らの改革の目標は、まずは保守的なストックホルムの芸術アカデミーに向けられたが、同時に彼らは集会を通して都会生活の不健全さや田舎の自然環境のすばらしさを語り合い、農民の生活に学ぶことに目覚めていった<sup>23)</sup>。こうして彼らは外光主義を受け入れ、そのリアリズムのまなざしでグレの農民の生活や自然を描くようになる。実はこのまなざしこそ、彼らに母国の文化的伝統やスウェーデン独自の自然の風景への郷愁を誘い、それらの固有の価値を再発見する視点をもたらしたのであった<sup>24)</sup>。文化的後進性を自覚していた彼らにとって、母国の民俗や自然の風景をモチーフに作品を制作する自信につながったと考えられる。こうして母国への想いを胸に、彼らは80年代後半に次々と帰国していった。スウェーデン美術界のナショナル・ロマンティシズムの思潮は、こうして一気に最盛期を迎えることになる。ところで現実的な次元で見ると、外光主義の採用によってスウェーデン人芸術家のパリでの評価は一気に高まった。84年4月のパリのサロンでは、スウェーデンの画家36人の51作品が一挙に入選したのである。この記録的成功で得た自信によって、その後の彼らは本格的に反芸術アカデミー運動を実行に移し、ついには86年「芸術家同盟」を結成したのである。

#### 4. ラーション邸建設の経緯

ラーションは1885年の夏に、妻カーリンの父アドルフ・ベリイェーと共に初めてダーラナ地



【図1】ラーション「改築前のリラ・ヒュットネース」  
『エット・ヘム』所収 1899 Bonnier 社蔵



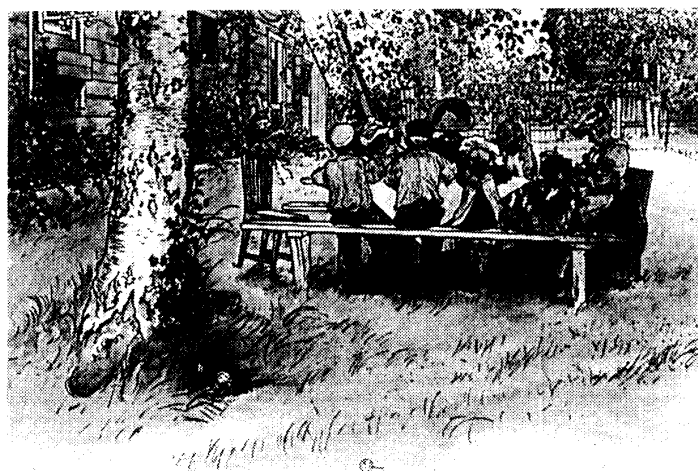
【図2】ラーション邸 「リラ・ヒュットネース」  
西側外観現況 1995 筆者撮影

方のスンドボーンを訪れている<sup>25)</sup>。アドルフが所有していた川のほとりの小さな住宅には、彼の2人の姉妹が住んでいた。この住宅は、ダーラナ地方に伝統的に見られる丸太造で「リラ・ヒュットネース（小さな小屋）」と呼ばれていた【図1】。ラーションがその環境を気に入ったのを見たアドルフは、その後偶然に空き家になった際、1888年ラーション夫妻にこの住宅を贈与した。夫妻は1889年にフランスからスウェーデンに帰国し、夏にスンドボーンに住んで住宅の増改築を開始する。1901年には、定住の場所をストックホルムからここへ、本格的に移している。ストックホルムよりスンドボーンでの生活を選んだ最大の理由は、パリやグレで再発見した母国スウェーデンの自然と伝統文化が、この地にはまだ豊富に残っていたためと思われる。さらに、スンドボーンでの生活が、彼の絵画制作の重要なモチーフになっていたためでもあろう。ラーション邸の増改築や室内の改装は、夫妻の共同のデザインに基づいて行われた。妻カーリンに関する研究によれば、彼女の非凡なデザイン能力が果たした役割はきわめて大きかったが<sup>26)</sup>、残念ながら本稿では紹介する余裕がない。増改築の際の建設作業や家具の製作などは、必要に応じて地元の職人の手を借りてはいるが、できるかぎり子供たちを含めたラーション一家の手で行われた<sup>27)</sup>。増改築は1901年に一応の完成を見るが、小さな改装やインテリアの配置変えなどは断続的に行なわれ、ラーションの亡くなる1919年まで続けられた。カーリンはラーションと築いた思い出を大切にし、彼の死後は住宅には一切手を入れなかったという。【図2】

## 5. 画集『エット・ヘム』のテキスト分析

### i) 『エット・ヘム』出版の経緯

1890年ごろから、ラーションは自邸とそこでの一家の生活の模様を、一連の水彩画に描き始めた【図3】。そのきっかけについて彼は「ダーラナ地方に数週間も雨が続いたときに、カーリンは以前からのアイデアを実行するよう私にすすめてくれた。それは家族の思い出に、この小さな家のすべての部屋の壁を描くというものであった<sup>28)</sup>」と述懐している。それら20枚の水彩画、



【図3】ラーション「大きな白樺の下での朝食」

『エット・ヘム』所収 1899 National Museum, Sweden



【図4】ラーション「私の家族」1892 個人蔵

と1892年の作品「私の家族」【図4】が、1897年のストックホルム博覧会に出品されたところ  
たいへんな評判を呼ぶ。すぐに2つの出版社が名乗りを上げ、1899年にボニエル社から、24枚  
の水彩画にラーションのエッセイが添えられたカラー刷りの画集として出版された。発行部数は  
記録が残っていないので不明であるが、1917年までに6版を重ねるたいへんな人気となった。  
この成功により、その後一連の画集『ラーション一家（1902）』『スバード・アルヴェット  
（先祖伝来のシャベル）（1906）』『日の当たる方へ（1910）』『よその家の子供たち（1913）』  
などが、次々と出版されている。『エット・ヘム』を中心に編集したドイツ語版『日だまりの家  
（1909）』は、1921年までに25万部を売り上げ、ドイツでもラーション邸の評判は高まった。

## ii) 『エット・ヘム』のテキストについて

『エット・ヘム』の構成は、前半部分に15ページにわたるエッセイがまとめて収められ、その  
後に24枚の水彩画が1ページに1枚ずつ連続して収められている。エッセイの部分には、さらに  
ペン画の挿し絵が合計14カット収録され、テキストと交えて構成されている。こうしたテキスト  
と水彩画との位置関係やページ数のバランスは、ラーションがこのテキストを単なる水彩画の解  
説文とは見なしていなかったことを推測させる。随所にユーモアを交えたテキストは、それ自体  
でも読み物として十分に楽しむことができる。当時のカラー印刷の技術的限界を考えれば、画集  
というよりはむしろ絵本に近い印象で読者に受け入れられたことも推察できよう。

テキストは大きく2つの章で構成されている。3ページ半からなる前半部分には「スンドボー  
ン、クリスマスイヴ、1898」というキャプションが、残りの部分には「夏至日、1899」という  
キャプションがそれぞれ添えられている。スウェーデンでは夏至祭という伝統行事があり、夏の  
到来をフォークダンスで盛大に祝う。すなわちこれら2つの日は1年で最も重要な祝日であり、  
実際にこれらの日に執筆されたとは想像しがたく、スウェーデンの伝統を意識させる目的で設定  
された日付であると考えられる。

## iii) テキストの内容分析

テキストの冒頭部分はクリスマスイヴの日という設定に沿って、ラーション自身のクリスマスの思い出から始められる。彼は極貧の日雇い労働者の家庭に生まれているが、子供時代に一度だけしかもらったことのないクリスマスプレゼントに感謝し、クリスマスの晩に父親が話してくれた昔話を懐かしく思い出す。

「彼（父）は、昔は古い教会のところまで潮が来ていた、と語る。それは彼が少年だったから、船をしっかりとつないでおくための留め金を見つけたときに、ただちに想像することができたのだ。われわれの遠い祖先はヴァイキングだったのだと。こうしたちょっと魅力的な方法でわれわれの祖先からの系譜を示すことが、この本全体の意味と関係がある。この本の中でスウェーデンの農民の精神が、最新のアメリカ製の“特許鋏”では掘りおこせないほど、深いところに根ざしていることを示すのだ。」<sup>29)</sup>

ここではヴァイキング以来の歴史の連続性を示すという、『エット・ヘム』におけるラーションの意図が明らかにされる。さらに当時の世相に暗い影を落としていたアメリカへの大量の移民流出を阻止するために、スウェーデンの読者を励まそうとする意志が表されている。

次にテキストには、自邸「リラ・ヒュットネース」を入手した経緯が説明されているが、これについては本稿で概略をすでに示した。テキストでは、その後で住宅の最初の増改築を行った様子が描写され、できあがった新しい家をこの本で紹介する意図が述べられている。

「楽しいやり方で家を装飾する欲求にかられた人に…うーん、これを言うべきであろうか … お手本として… うわっ、言ってしまった！役に立つと思う賢明な方法を示したいと思っているのだ。」<sup>30)</sup>

出版のもう一つの意図として、読者が家を改装するための手がかりとして、この本が利用されることを彼は期待していることがわかる。この後、わずかに増改築に対する苦勞が語られ、次のような詩が示される。ラーションが子供時代に歌の本で見て、記憶に残っていた詩であるという。

「勤勉と山のような希望は／君の苦勞を小さくする／太陽は君の努力を照らすために／やさしく高みに昇るだろう／たしかな前進、増える安心／さらなる人生の喜び／そのとき自分の楽しい住まいが／目の前に建っているのだ」<sup>31)</sup>

この詩の引用には、読者が自らの手で増改築を手がけることの勧めが暗示されている。実際ラーションの自邸は、当時の貧しい労働者階級の人々が「持ち家運動」<sup>32)</sup>で手に入れた土地にセルフビルドで家を建てる際の、精神的な支えになっていったのである<sup>33)</sup>。

次にラーションは、現在が芸術家にとって困難な時代であるという認識を示す。実用的だが退屈な主義でいくのか、贅沢な人間の好む無趣味な工業製品の安びか装飾にするのか、の二者択一になっている現状を嘆く。また名もない農民たちの手工芸に潜む芸術性を、大多数の純粋絵画よりも価値があるとして高く評価する。さらに昨日はパリやベルリンから、今日はイギリスやアメリカから外国のデザインを借りて、スウェーデンらしくないことがすばらしいとする風潮を嘆く。

「だから、おおスウェーデン人よ。質素さと高潔さに戻ろうじゃないか。洗練よりむしろ不器用を選んで、毛皮や革やウールを着て、自分のいかつい身体に合った身だしなみをして、すべてをいわゆる田舎者のけばけばしさと呼ばれる強烈な色でやればいい。深い緑色をした松の森や真っ白く凍てつく雪の正反対のものとして、これらは必要不可欠だ。洗練なんていう趣味を忘れて、描きたい模様を描けばいい。そうすればやっと幸せな気持ちで君自身になれる。そしてずっと地球上で生き延びるのだ。アーメン。」<sup>34)</sup>

文化的な先進国に劣等感を持つ必要はなく、スウェーデン人としての正直な感情に従うことで、真のアイデンティティーを発見することを彼はすすめる。しかしそのために必要なのは、スウェーデンの文化に対する再評価の視点と自信ではないか。それは、第2章以下に示される。

ここからテキストは、「夏至日」と記された第2章に入る。第2章では、水彩画の流れを意識して、来客に家を案内するように各部屋の説明がなされる。自邸の増改築の経緯がわずかに示されるが、話の中心は住宅自体よりもむしろそこで繰り広げられるラーション一家の愉快的日常生活であり、そこにザリガニ採りやネームディなどの伝統行事、カーリンの作る郷土料理のレシピ、豊かな自然環境の情景、カーリンや子供たちへの愛、自身の人生観などが織り交ぜられる。

「夏のよく晴れた日や雨の降らない日、われわれは家の裏の大きな白樺の木の下で食事をとる。それは、そう、なによりも最高だ！ もしそこに白樺がなかったとしたら、私にはもはやまったく価値がない。」<sup>35)</sup>

スウェーデン人は夏に屋外で食事をする習慣があるが、それは短い夏の太陽をできるだけ楽しむとする姿勢の現れである。白樺はスウェーデンの自然を代表する樹木の一つであり、ここではラーションの思いが誇張ぎみに表現されているように思える。

アトリエを紹介する場面では、壁に飾られたハッランドの18-19世紀転換期の農民画について、

「これはジョットのフレスコ画と同じ発想の純朴さと趣味を見せているが、私にはむしろもっとおもしろく思える。(中略) ダーラナやノルランド地方の農家の壁に、この古い絵が描かれているところを想像してみたまえ。一コマごとにこんなにも深く真剣な感情が、こんなにも画期的で、それでいて健康なユーモアが、そしてなんて民族的な造形感覚なんだろう！」<sup>36)</sup>

ジョットに言及したのは、スウェーデンの読者に自国の伝統文化の価値をわかりやすく訴える啓蒙的な意図があったためと考えられる。パリで認められた画家であるラーションが、このように自国の名もない農民の作品を最大限に賛美することに、重要な意義があったものと思われる。

全体を通して、文体は古語や押韻を用いてリズムと響きを意識した美文調であり、読者にスウェーデン語の美しさを再認識させることも意図されているのだろう。ユーモアを交え、読者である国民に愛情と親近感をもって語りかける。「私は君たちが大好きだ！」「親愛なる読者諸君！」その語り口の魅力は、この本が読者に支持された理由の一つであると考えられる。

全体を貫くテーマは愛国心と郷土愛であるが、それはあくまでも健全な性格であり、外国に対して優越感を示すような表現は見られない。ヨーロッパの周縁に位置する国民の劣等感を、なんとか乗り越えようとする切なる願いが込められているといえよう。さらに家族愛と人生の歓びとが高らかに謳われることで、民衆がいつも手にしているなにげない日常生活の中にも、かけがえない幸せが潜んでいることを主張していると考えられる。またラーションの家族全員が、実に伸び伸びと住宅の改装に取り組んだり、日常生活を送ったりしていることも注目に値するだろう。

今日のスウェーデン社会が要求する「平等」とは比較にならないにせよ、家父長的な因習が画期的なほど姿を消していることは、ラーションの思想が古きよき時代を懐古したり、伝統を重んじたりするだけでなく、新しい生活像を見据えていることを表していると考えられる。実際、ラーション邸の建築は、伝統的なモチーフを新しい感覚で巧みに構成することにより、同時代の建築家たちが思いもよらない斬新な造形を見せていた<sup>37)</sup>。伝統的であろうとする姿勢が、古いも



のを愛でることで満足していないところに、ラーションの近代性が認められるといえよう。  
テキストは次のような美しい詩で閉じられている。

「スウェーデンに生きる／草原で、峡谷で／森の中で、湖で／緑の広場で／見つめよ、この存在を／見つめよ、この生命を／友だちと分かちあい／子供たちと、つれあいと分かちあい」<sup>3 8)</sup>

## 6. 結語

ここで『エット・ヘム』のテキストから看取されるラーションの思想の概要を整理して、本稿の結語としたい。

- ① まず伝統と現在の連続性が強く意識されていることである。過去はただ懐古される対象だけではなく、ラーションの時代まで生き残っているものであり、読者であるスウェーデンの国民が気づいていない伝統文化や習慣の価値を再認識することの意味を重要視していることがわかる。
- ② 無名の農民の絵画に潜む高い芸術性を指摘するなど、芸術の専門家による高尚な純粋芸術以外にも、価値を認める態度である。本稿では論じる余裕がなかったが、ラーション邸の造形にも建築家が関与しないことから生れた自由な発想が見られる。
- ③ 民衆の平凡な日常生活を肯定し、そこに人間の基本的な幸福を位置づける視点である。これによって裕福ではない民衆にも、すでに手に入れている幸せを訴え、スウェーデンで生活することに自信と勇気を与えることを願っている。
- ④ 感謝や信頼といった伝統的な美徳の価値を重視しながらも、家父長的な因習をできるだけ遠ざける生活像を見出そうとしている点である。今日的な視点からは、まだ前近代的な夫婦間の地位なども見られるが、当時としては新しい家族像を提供していると思われる。この点に関しては、本稿ではまったく論じることができなかった。稿をあらためて、女性や子供の地位に対する当時の思想（エレン・ケイに代表される思想）を検討する必要があるだろう。
- ⑤ 最後に、上述のように積極的に国民を啓発し、スウェーデン人が自信を取り戻すための活動に、芸術が大きな力になると考えている点である。これは他のナショナル・ロマンティズムの芸術家たちにも共通した態度であるが、新しい理想の社会をつくるという目標の中で、芸術をはじめとする文化の役割を大きく評価している点に、彼の思想の特徴が認められよう。

## 註

- 1) 原語は、英語では National Romanticism、スウェーデン語では nationalromantiken。ナショナル・ロマンティズムの思潮は、中欧や南欧を含めた広い地域で見られた。特に北欧や東欧のようにヨーロッパの周縁に位置する地域においては、ナショナル・アイデンティティーを求める姿勢がより切実で強固であったため、いっそう顕著な動向となって結実した。
- 2) カール・ラーションについては、1992年にスウェーデンで大規模な回顧展が開催されたのに続き、1998年にはロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムにおいても大規模な回顧展が開かれ、欧米を中心に世界的な再評価の気運が高まっている。
- 3) 「自邸」は本稿では、設計者（デザイナー）と施主（利用者）が同じ、という意味で用いている。
- 4) ラーション邸が、スウェーデンの近代的住宅像や近代的な生活像の形成に果たした意義については、拙稿「スウェーデンの近代的住宅像形成過程におけるカール・ラーション自邸の意義」「意匠学会会誌 デザイン理論」35号、1996、pp.57-70 参照。

- 5) ラーション邸と当時の建築家との関係に関しては、これまでスウェーデンにおいてすら意外にもほとんど論じられてこなかった。拙稿「カール・ラーション自邸 周縁に咲いたもう一つの近代」『住宅建築』、建築資料研究社、1999年6月号、pp.146-154 は、その点に踏み込んでラーション邸の意義を論じる試みである。
- 6) 原題は Ett hem. ett は不定冠詞中性、hem は住宅を表す語で英語の home に近い意味である。
- 7) 画家の思想について論じる場合、作品自体を対象とした考察が最初になされるべきなのはいうまでもない。ここでは建築史研究の準備作業である本稿の立場から、作品の分析にはあえて比重を置かないこととする。
- 8) スウェーデンは17世紀に「バルト帝国」として北ヨーロッパに君臨したが、18世紀にはその地位を失った。
- 9) folkrörelse (スウェーデン語) 訳語は石原俊時氏の先例にならった。
- 10) 国民運動の経緯とその内容に関しては、石原俊時『市民社会と労働者文化』木鐸社、1996 参照。
- 11) Fred Nilsson, *Emigration från Stockholm till Nordamerika 1880-1893*, Stockholm, 1970, p.11.
- 12) Erland Hofsten, *Svensk befolknings historia*, Kristianstad, 1986, p.15.
- 13) 筆者は北欧の近代芸術に特異性を与えた要因として、その地理的な条件を指摘するだけでなく、さらに踏み込んで北欧文化の「後進性」という視点から考察を試みてきた。ここでは「後進性」を負の価値ととらえるのではなく、北欧諸国が独自の近代的な文化や社会を生んだ要因として、積極的に評価している。
- 14) スウェーデンの芸術家たちは、彼らの反「芸術アカデミー」運動のために、1886年「芸術家同盟」を組織化した。「芸術家同盟」結成に至る彼らの軌跡に関しては、註4に示した拙稿を参照。
- 15) Johnny Roosval, *Swedish Art*, Princeton, 1932, pp.70-77. ルースヴァルは同書中の左記の箇所で、スウェーデン建築の1900年から1930年にかけてを「ナショナル・ロマンティシズムの時代」と呼んでいるが、その意味に関して定義や説明を一切しておらず、詳細は不明である。
- 16) スウェーデンの建築史では、思潮の内容にリアリズムの傾向が強く見られたことから、nationalrealismen の呼称を提唱する研究者も少なくない。これは美術と建築との性格上の違いにも起因しているが、建築におけるナショナル・ロマンティシズムの開花が美術よりもやや遅れたことも関係していると思われる。拙稿「アスプルンドの初期の活動について グンナー・アスプルンドの建築に関する研究 その1」『日本建築学会 計画系論文集』499号、1997、pp.207-214 参照。
- 17) Salme Sarajas-Korte, *The Scandinavian Artists' Colony in France, Northern Light : Realism and Symbolism in Scandinavian Painting 1880-1910*, New York, 1982, pp.60-66.
- 18) Emily Braun, *Scandinavian Painting and the French Critics, Northern Light*, pp.69-70.
- 19) Bo Lindwall, *Konstnärskolonin i Grez*, Stockholm, 1993, pp.12-16, 22-28.
- 20) Axel Friberg, *Karin en bok om Carl Larssons hustru*, Stockholm, 1967, pp.44-47.
- 21) カーリンの才能がラーションに与えたであろう刺激も見逃すことはできない。グレでの2人の活動に関しては、次の文献を参照。Ingrid Andersson, *Karin Larsson*, Stockholm, 1986, pp.54-59.
- 22) 以上のラーションの事跡に関しては、主に次の文献を参考にした。Torsten Gunnarsson, *Carl Larssons liv och verk en översikt, Carl Larsson*, Stockholm, 1992, pp.27-60.
- 23) Bo Lindwall, *Artistic Revolution in Nordic Countries, Northern Light*, pp.40-42.
- 24) スウェーデン的な特質を追求していた彼らは、母国の自然を「発見」したという。Richard Bergh, *Svenskt konstnärskynne, Ord och Bild*, Stockholm, 1900, p.131. 参照。
- 25) ダーラナ地方はスウェーデンの中部に位置し、同国の郷土文化の核となる地方。伝統的な風習がよく残る。スンドボーンは銅山の町ファルンの郊外の村であり、森や湖、川、草原、民家が美しい風景をつくっている。
- 26) 註20および註21であげた文献を参照。
- 27) ラーション一家は、三男四女の計7人の子供をもうけた。
- 28) Carl Larsson, *Jag*, Stockholm, 1992 (1st edition 1931), pp.122-123.
- 29) Carl Larsson, *Ett hem*, Stockholm, 1992 (1st edition 1899), pp.1-2.
- 30) *Ett hem*, p.2.
- 31) *Ett hem*, p.3.
- 32) 『エット・ヘム』が出版されたのと同じ1899年に、政府は「持ち家委員会」を組織し、当時の社会問題となっていた都市のスラム化と移民流出に歯止めをかけるため、労働者階級に格安で都市郊外の土地を提供し、持ち家を奨励する政策に踏み切った。そのための労働者による運動を「持ち家運動」と呼ぶ。
- 33) 拙稿「カール・ラーション自邸 周縁に咲いたもう一つの近代」p.154 参照。
- 34) *Ett hem*, p.4.
- 35) *Ett hem*, pp.7-8.
- 36) *Ett hem*, p.11.
- 37) 註5に同じ。
- 38) *Ett hem*, p.15.

(平成11年12月20日受理)